

# 日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第16号 1995年7月1日

## 土佐和船造りの基礎方式

田辺 寿男

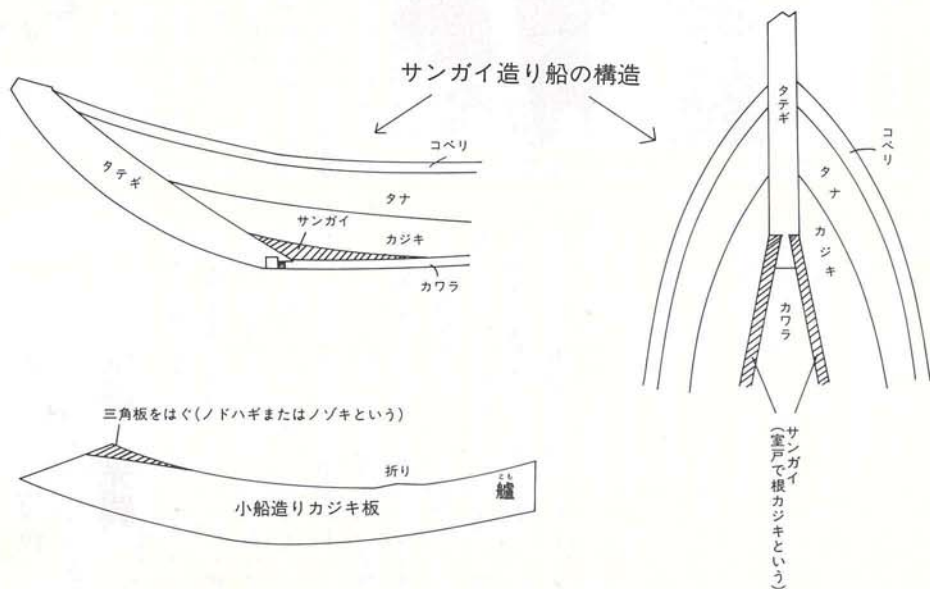
高知県では船底のことをカワラと呼ぶ所とシキと呼ぶ所がある。土佐種崎浦の船匠岡四郎右衛門の「船作様口傳海上記」によると、「梶木之事、三名有、梶と云、敷と云、浪敷と云」とある。また『和漢船用集』住田正一編によると、桐航とあり、「舟元にならふ」。桐かはらトモかはらの二つかはらなるべし」とあり、刳船を軸と櫓に接ぎ合わせたカワラの様子を表現している。時代とともに変遷した船底は造船の基礎であり、土佐で船主が幾尋の船をと要求があるとカワラの寸法を指す所が多い。これによって船の大小や価格が定まる。

船造りは、このカワラを囲んで軸に立木、櫓に戸立が付き、側面を囲う板がカジキ板である。これらの組み立てに棚を付けて船張りを張ると船になる。船の歴史は崇神天皇のころからといわれる。私はそこから昭和の初期に至るまで、どのような理由によって、どの部分の構造が改良されて来たかに興味をもっている。

さて、戦では古代の朝鮮出兵に既に帆布が使われたという。したがって、

延享年間に全国に有名をさせた土佐のソギ船に使われたのも当然木綿帆であろう。延享から十余年たつて優秀な「松右衛門帆」が現れ、これが大正年間まで重宝されるのであるが、ソギ乗りとは逆風に船を乗りきる新技術を贅えたものであるとすれば、帆の操船術もさることながら、それ以上に造船構造に技術の考案があったのではあるまいかと考える。

すなわち中近世の御座船や北前船などには、



カワラとカジキの間に「根棚」という頑丈な板を軸から櫓まで補強してあり、この装置によって中棚を寝かせて荷積に安定した幅広い船を構成した。

## 企画展「死と再生の文化」

# 高知の死の文化を考へる

梅野 光興

土佐では根柵のことを「サンガイ」あるいは「根カジキ」といって、軸の部分のみにこれを付ける。一方サンガイを備えない船の構造は、小船造りと言いつつ立木・カワラ・カジキを接続する構法であり、いやでもカジキが立つ構図となる。

たぶんソギ船の構造は、後者のようにサンガイに工夫を凝らし、立木を垂直に立てることによって、カジキの角度を立て、軸を刀のように削いで海中に沈め、風の抵抗をやわらげ、船足を速めたものであろう。このとき艀部はカジキを寝かすことによって船を波に据える構造に組む。つまり帆船の基本形である。明治以降カツオ船・サンゴ船など遠洋船に研究応用されたのはこの方式であり、「シビ繩は後家繩」という昔の諺を忘れたのもこのころである。それまでは、風に無抵抗な樽船の浮かせ型で沖乗りをして遭難していた。このように土佐の和船構造にはその用途によって、二つの様式があることを述べてみた。小船造りには櫓船・帆装船・つり船等があり、サンガイ造りには荷船・大敷船・磯船・湾内係留船などがある。軽量を好む陸揚げ船のなかでも、波打際の急に掘れた浜の荒波に軸を向けて下ろす地曳船などには軸が砕けないように、また波に浮くようにサンガイを付けてカジキを寝かした。

今年の夏、当館では「死」をテーマにした企画展を行なう。「死」の企画展と聞くと、大抵の人は顔をしかめるかも知れない。五年ほど前、館の会議ではじめてこの企画を出したときも確かそのような反応だったように思う。死はそれが他人のものであれば、

らく悲しいものである。また自分の死などあまり考えたくはないものである。「死」に拒否反応を示すのは当然のことである。

だが、死が私たちにとって避けがたいものであることも事実である。

私たちの祖先（それも既に死者なのだ）たちは、死という不可避の事態に対処するために、葬式や盆などの行事や宗教など文化的なパターンを作ってきた。それは、人が死んだらどうするかという説明であり、実際に人が死んだらどうするかという方法であった。これは死の文化といっても良いだろう。近年、この死の文化が大きく変わり始めている。それまで自分の家で死ぬことが多かったのが、病院で息を引き取る人が増え、ムラやマチの共同体によって行なわれていた葬式は葬儀屋

にとつてかわられるようになった。また、高知県では、これまで多かった土葬が次第に火葬へと変化しつつある。近年、メディアが死を話題にすることが多くなったが、それもこのような死の文化の変質と無関係ではない。病



出棺。棺を三回まわる。（日高村本郷）

ほどのようになっていくのだろうか。このことを考へるためにも、私たちの祖先が、死という現実をどのように考へ、死者に対してどのようにふるまってきたのかを知ることは大切である。

今回の企画展は、高知県内の墓制、葬送習俗や盆行事、宗教絵画（十王図や来迎図）を通して、高知県の死の文化を考へようとするものである。県内には死の文化を語る資料は数多い。特に盆行事や葬式の作法など町村ごと集落ごとに異なっている。これらの全てを展示することは不可能で、紹介できるのはほんの一部である。

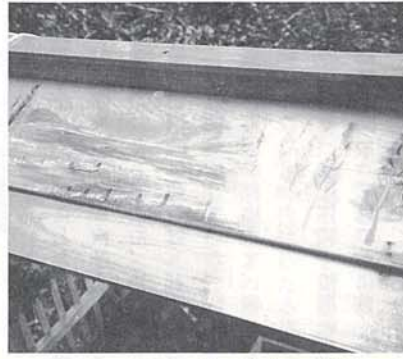
企画展の準備のため平成四年から資料調査員の方々に死の習俗についての調査を依頼し、五年と六年には自分でも県内を何箇所かまわってみた。その中で見たいくつかの風景や耳にした伝承は記憶に鮮やかである。

院へ、葬儀屋へと死がその専門家にゆだねられるようになっていくにつれて、確実に死は私たちから遠のいていく。私たちは逆にメディアの中に死の情報を求めるようになっていくのである。この変化はわずかここ何十年かのことと言われている。これから死の文化

雨の日、佐賀の墓地では美しい雨覆いを見た。雨覆いは日覆いとも呼ばれ新墓に置かれるものである。ふつうは家の紋や簡単な模様がある程度のもので多いが、その雨覆いは板の上に色鮮



やかな絵の具でまるでカンバスのように絵が描かれているのだった。青い太い川が横たわり、その上に燃えるような赤い空が広がっている。川にはいくつかの船も見える。これは他界の風景である。雨に濡れたその絵は更に鮮やかさを増しており、私はその美しさに息を呑んだ。



雨覆いの屋根の絵（佐賀町佐賀）

注意してみるとお墓地のあちこちに散乱する雨覆いの中にも、船や花の絵の描かれたものがあった。それらの或るものは色あせ、或るものは板と共に朽ちつつあった。

佐賀では死者の雨覆いに生前死者の好きだった物や生活を象徴するものを描いて供養にするのだという。花札の好きな者には花札、お酒の好きな者には徳利、漁師には船の絵、百姓には野良仕事の絵、それは葬儀の前に一時間程度で葬式組の者が描くのだという。

このような習俗は、県内はもちろん全国的にも珍しいものである。

死は黒と白というのが私たちのイメージだろうが、葬具には意外と色鮮やかな物がみられる。佐賀の雨覆いもそうだが、今回の展示のために特別に作ってもらった十和村小野の天蓋も、棺と一緒に埋めてしまうには惜しいよう

なききれいな物であるし、葬列に添えられる花などにも美しい物が多い。

これらの葬具を作るのは死者の出た組の仲間である。死者の旅立ちをせめて美しく飾ってやりたいという、遺された者たちの想いがこれらの葬具には込められているのである。

私たちが死者とまみえる場と言えは真つ先に墓場が思いおこされるが、盆行事の中では必ずしもそうではないようである。

中土佐町久礼の海岸を盆に訪ねた人は砂浜を埋めつくすシキビの列に目を見張るだろう。

これは海から来る死者を迎えるため一家の主婦や主人が海岸で火を焚き水を供える行事である。盆の間久礼の私たちは海に入らない。祖先の霊が海にやってきているためである。

このような行事は高知県全域で行なわれている。海の無い所は川や泉が祖霊迎えの場となる。祖霊は水の中からやってくる。死者は私たちの身のまわりの自然と溶け合っているのである。人は死ぬと、木や植物や水や風などより大きな生命に吸収されていくーそんな風にイメージされていたのではないだろうか。

このような伝承もある。  
高知県東部には死後六日目に死者が帰って来るとの伝承が聞かれる。死者



水棚をまつることをまづる新仏の盆。安芸市上尾川の水棚は庭に作られることが多いが、上尾川では川辺や川の中に作る。祖霊と水の結びつきの強さを感じる。



祖霊を海から迎える。（中土佐町久礼）

の寝室に灰を入れた膳を置いておくと翌朝灰の上に死者が生まれ変わった物の足跡がつくという。それは鳥であったり蛇であったり蝶であるのだという。私たちの魂がどうなってしまうのか確実なことは言えない。だが、私たちは水や木や鳥や虫などの生命の宇宙の中で自分たちのいのちについて想像力を働かせてきたようである。

死を考えることは私たちの心の深層を探ることでもある。企画展開催中には三人の講師による講演会と学芸員の講座を二回準備して、更に深く高知県の、チベットの、そして人間の死について考えてみる予定である。この企画展が人間とは何か、自分は何者かという問いを考えるきっかけになれば幸いである。



# 企画展 「死と再生の文化」

によせて

岡本 桂典

人間には必ず死が訪れる。これは、人類誕生以来、平等に行われてきた現象である。

生まれて初めて死にであったのは、五才の時であったと記憶している。それは、祖父の葬儀の時であった。その時の葬儀のことは、何故か鮮明に一部記憶している。埋葬後、祖父の墓の土が盛りあがっていたこと、その祖父の死体が腐敗していく様子を子供心に描いていたこともあった。

「それと同時に死者は、どこへ行くかという疑問をもっていた。」その疑問は、現在も解かれぬまま、常に心のどこかにあった。

この疑問は、臨死体験や輪廻転生という問題と関わって私の前に重く立ちだかっている。現在、上記の研究は、医学者や宗教学者などを中心に、外国で活発な研究がなされている。その一つの研究書が日本でも出版されている。

死をとり上げること自体がタブーであるかも知れない。しかし、最近死に関してメディアを通して一般の人々が関心をもつようになってきている。

一九九三年秋、NHKにおいてチ

ベット人の世界とともに、『チベット死者の書』が紹介されたことは記憶に新しい。これに伴って『チベット死者の書』関係の書物、そして死、死後の世界や臨死体験 (Near Death Experience) の書物が話題になるようになった。これに対し、チベット研究者から新聞紙上や雑誌を通しての批判も出された。

『チベット死者の書』とは、チベット語で『バルドゥ・トエ・ドル (中有救度法)』 (中有で御教えを聴くことによる解脱) と呼ばれている。バルドゥ (中有) とは、人間が死んで次の生を受けて生まれ変わり、輪廻転生をつづけていくまでのことで、長くて七週間の四九日にわたる生と死の中間期のことである。この書は、チベットにおいて現在でも葬式の際に密教古派 (ニンマ) で用いられている。

本書は、今世紀のはじめにアメリカのエヴァンス・トエ・ドルが英訳し、『バルドゥ・トエ・ドル』に『チベット死者の書』という題名をつけたのである。心理学者のC・G・ユングは、本書を座右の書とし、多くの刺激や知

識を与えられたとしている。また、ホスピス運動やセラピストにも影響を与えた。

川崎信定氏は、「『死者の書』と呼ばれながら、その実は、生きている人、その生の意味と内容を問いかけてくるのが本書である。常識的な生死の枠組みを越えた、永遠のいのちのすがたをしめす、壮大できわめて高度な精神世界の扉を開いて見せる書である。」と述べている。(『チベット死者の書』CD版解説 一九九四年四月)

さて、人間が死ぬことを一般に西洋社会では、命を失う (高知ではハミてるV) などという。インドにおいては、肉体を去るという。私が、インドのガンジス川でみたものは、まさにその姿であった。



インド ガンジス川 (沐浴をする人々と火葬場の煙がかすかに見える)

眼の前で立ち上る火葬の煙、そしてその近くで沐浴する人々、まさに生と死が交差する世界であった。インドでは、人は魂であり、魂が肉体という衣をままとっているに過ぎないという。そう言えば学生時代にお会いしたグライラマ十四世もそのようなことを話しているのを聞いたことがある。

死をタブー化することは、一死についていちばん話し合わなければならぬものにとつて、話し合うことができずに迷いと恐怖の中で人が亡くなる時に非常な苦痛をあたえるという。

隠匿されていた死の問題が語られるようになったのは、E・キューブラー・ロスの研究からではないかと思う。

E・キューブラー・ロスは、末期患者の死の受容の過程を研究し、『死の間』死にゆく人々との対話 (一九六九年 邦訳は一九七一年) という書物を出した。この本は、医学関係者をはじめ多くの人に読まれ、ベストセラーになった。近年、日本においても脳死や臓器移植、臨死体験など死への関心が高まっている。かつて、人は自宅で死を迎えることが多かった。現在は、医療技術の進歩で病院で死を迎えることが多いように思える。まさに我々にとって「死」が見えにくくなってきていると同時に死の恐怖から死を隔離しようとしているようにもみえる。





中世の墓（大塚遺跡）



中世の地蔵板碑  
地蔵は、閻魔王の本地仏とされ、地蔵の前に罪状を読み、記す司禄・司命がいる。

今回の企画展では、『チベット死者の書』と『タンカ』を期間を限って特別展示し、また高知県内で発掘された縄紋時代から江戸時代にいたる墓や中世・近世の板碑や墓標などの墓の変遷や葬送儀礼・盆行事そして絵画などをおして、私たちが死とどのように関わってきたのか、その死と再生の文化を垣間みてみたいと考えている。人は自分の周辺において、人が死を

迎えても、不思議なことに我々だけは死なないと思っている。いや、死ぬと思っていると反論されるであろうが、それは死を認識しているにすぎないのではないだろうか。

現在、死の教育を大学で行っているところが増えているという。京都大学ではカール・ベッカー氏が臨死体験というテーマで授業をしているという。死という体験は、実際は個人的なものである。それを知ったときには、我々はすでに死の彼方に旅立っている。死や死後の世界は、永遠に謎かも知れない。しかし、我々は今、理性や自我を越えた何かに気付き始めているのかも知れない。

私は仏教という空を背景にしたと思われる次の言葉が好きだ。

「誕生の時には、あなたがなき、全世界は喜びに沸く。死ぬときには、全世界がなき、あなたは喜びにあふれる。かくのごとく生きるのだ。」

（中沢新一『三万年の死の教え』より）

## 企画展 死と再生の文化

平成七年七月一日（金）～九月一七日（日） 休館日 月曜日

人間には、必ず死が訪れます。現代は、医療や看護、臨死体験などをめぐり死への関心が高まっていると同時に日本人の伝統的な死生観が問われている時代とも言えます。今回の企画展では、高知における墓の歴史や葬送・盆行事などをおして我々が死とどのように関わってきたかを考えてみようと思います。また、死後の世界を描いた『チベット死者の書』と『タンカ』を企画展期間中、左記の期間の二週間に限り特別展示します。

特別展示 『チベット死者の書』と『タンカ』

平成七年七月一日（日）～七月三〇日（日）まで

### 関連企画

#### 講演会（要予約）

第一回 七月二日（土）午後二時～四時

「土佐の念仏芸能」 高知大学助教授 井出幸男氏

第二回 七月二九日（土）午後二時～四時

「チベットに生きる人々」

立正大学助手 則武海源氏

第三回 九月二日（土）午後二時～四時

「医療人類学からみた日本人の生と死の問題」

九州芸術工科大学教授 波平恵美子氏

#### 講座

第一回 八月五日（土）午後二時～四時

「墓の考古学・2―墓標の歴史―」

当館主任学芸員 岡本桂典

第二回 八月二六日（土）午後二時～四時

「盆行事に見る土佐の死者の世界」

当館学芸員 梅野光興



# 土佐の宝篋印塔(一)

## 野市町御墓所の宝篋印塔

岡本 桂典

宝篋印塔は、中世・近世に墓塔、或いは供養塔として多く造立される石造塔婆の一つである。

さて、これらの石造塔婆について川勝政太郎氏は、『新版考古学講座』六巻「墓塔の造立」の中で「墓塔とは、被葬者の墳墓上に立てられる塔」で「墳墓上に立てられ、墳墓の標識を兼ねている場合に、墳墓の供養塔という意味を略して墓塔と称する。単なる標識ではなく、根本的に供養塔としての意義をもつものである。」(註1)とされている。つまり、石造塔婆は造立目的により墓塔と供養塔にわけることができるのである。これは、墳墓上に造立されていなければ、墓塔として把握できないことを示している。

県内に残る宝篋印塔は、完形品や塔の一部を残すものを含めかなりのものが遺存している。それらについては、早急に所在調査や銘文の判読をしないと十年もすれば判読できなくなるであろうと思う。

そのような現状の中で、一九九三年に野市史談会が行った御墓所所在の宝篋印塔の調査は、個人ではなく史談会

と町独自で調査を実施したことに意義がある。

宝篋印塔を含む石造塔婆は、必ずしも原位置を保っているとは限らない。

石造塔婆は、伝承のみで早急に某氏の墓塔、供養塔として位置づけることにはいささか問題がある。銘文などによって某氏の墓塔或いは、供養塔として確実に証明できなければ、確定することはさけなければならぬ。このことは、過去において歴史学者が伝承のみをもって確定した墓を、現在でもそのまま資料批判もせずに、某氏の墓として位置づけ、これが史実化していることから伺える。

御墓所は、香美川の右岸に位置している町指定の史跡である。当地は、御墓所と呼ばれていたが、後になまって「おみせ」と呼称されるようになったといわれる。現在当地には、香美神社があり、いくつかの石碑が建立されている。

さて、香美郡野市町の東方は、香宗とよばれ、戦国時代において、香宗我部氏の根拠地であった。香宗我部秀通は、香宗我部氏系図によれば、親秀の

弟にあたる。大永六(一五二六)年に安芸氏との戦いにおいて親秀の嫡子秀義が死亡、後親秀の養子となった。この時期は、現南国市岡豊城跡の長宗我部国親の勢力が強大となり、東の安芸氏、西は長宗我部氏から圧迫され、脅威にさらされていた。そこで、親秀は

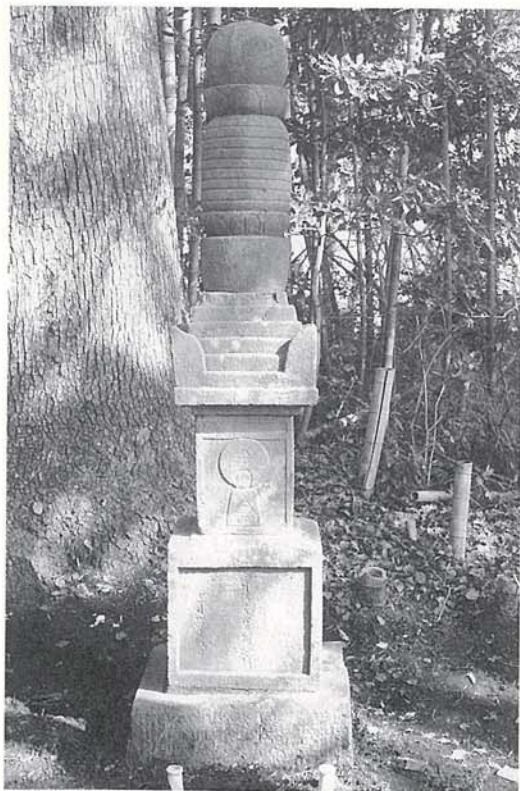
長宗我部国親の三男親泰を秀通の養子とし、長宗我部氏と手をにぎることになった。そして、秀通に引退を進めた。しかし秀通は、この要求にせず、弘治二(一五五六)年に親秀は家臣に命じて、香我美野(香宗我部城西方)で

秀通を要撃したといわれる。秀通は、割腹し、多くの殉死者がでた。秀通の遺骸は、火葬され殉死者と同地に埋葬されたと言われている。秀通の戒名は、

「華嶽院殿王奠大居士」という。現在、先に述べたように現地は、御墓所と呼ばれている。ここに所在する宝篋印塔が秀通墓(「香宗我部秀通墓」『日本歴史地名大系四〇巻―高知県の地名二〇四頁 一九八三年十月刊行』)と呼ばれている。

さて、この宝篋印塔の基壇の幅は六二cm、基礎は高さ四二cm、幅四四・五cm、塔身は幅二〇cm、高さ三四cm、笠は下部幅四二cm、高さ三二cm、相輪は高さ七三cmである。総高は、基壇を除いて一八一cmである。

基礎正面には、右に「天正二十年施主」、中央に「為月溪芳心大禅定門」左に「十一月廿四日 敬白」とある。右側面には種子「サク」(勢至)、



御墓所 天正20年銘宝篋印塔

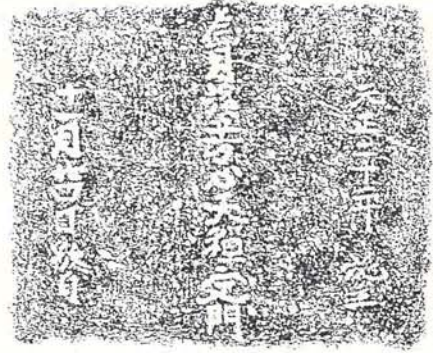




## 歴民スポット⑥

### 総合案内カウンター

来館のお客様の窓口、総合案内では様々なサービスをご用意しています。「図録」、「紀要」等の出版物、オリジナルの「絵はがき」、「テレホンカード」の販売をはじめとして、歴民館発着のバス、周辺の史跡のご案内を行っています。その他、歴民サークル、館主催の史跡巡り、講演会の申込受付も承ります。館内でお気づきになったこと、ご要望は総合案内まで気軽に声をかけ下さい。



宝篋印塔基礎銘文拓本

面には「ウーン」（阿閼）、左側面には種子「アク」（不空）の金剛界四仏が彫られている。宝篋印塔に仏像の彫られている例は県内では、極めて珍しいものである。

基礎正面の「月溪芳心大禪定門」は『野市町史』上巻の「第四章香宗我部親泰―第7節―戦国以後の香宗我部・中山田氏」（註2）にみえる親氏の戒名と同じである。この宝篋印塔は、基礎に刻された戒名より、秀通の墓塔ではなく香宗我部親氏の供養塔と考えられるのである。

註

（1）川勝政太郎「墓塔の造立」（『新版考古学講座』六）一九七〇年八月（東京）

（2）野市町史編纂委員会「第4章香宗我部親泰―第7節―戦国以後の香宗我部・中山田氏」（『野市町史』上巻一九九二年四月（高知））

## 本棚

### 「土佐自由民権運動日録」

土佐自由民権研究会編

（高知市文化振興事業団 一〇、〇〇〇円）

本書は、明治の自由民権期に土佐の各地でおこった日々の事件を当時の新聞や各種の史料から採録し、日付順に編成したものである。明治十年代に各町村で開催された政談演説会などが細大もろさず収録されており、まさに「民権の日々」が今よみがえるといった感じの極めて詳細な日録である。

十年前、土佐自由民権研究会で原稿作成の作業がスタートしたとき、私もカード作りを少しだけお手伝いし、後には多忙を理由に公文豪副会長にお願いした。公文氏は、原典を再三チェックしながらカード類を丹念にワープロ入力するという超人的な作業に専念された。（この間、私共にはできたことといえば、酒席で同氏に対し、「反民権派の新聞記事も調べにやあいかなぜ」と生意気を言わせてもらうことだけだった。――同氏は怒りもせず、全てを調査された。――この姿勢には、ただただ脱帽するばかりである。）そして、最終的には外崎光広会長はじめ関係者の綿密な校訂を経て刊行の運びとなったものである。

本書は五百頁に及ぶ大冊で、明治七

年の立志社創立の頃から同二十五年の選挙干渉に至るまでの間の民権関係の記録が圧倒的分量を占めている。加えて、慶応三年以降の基本事項や関連事項も紹介されており、これを通覧すれば明治期前半の土佐の政治や社会の状況をつぶさに知ることができる。また、特定の人物や地域の動向を細部にわたって追及することも可能である。例えば、明治十四年政変前後における板垣退助らの東北遊説についても、一行がいつどこで政変情報に接したかまで分かり、また板垣らが遊説の途中、戊辰の役の戦没者（小笠原唯八ら）の墓参りをしていたことまで紹介されている。ここには、明治の政治史と板垣の個人史が織り込まれているように感じられる。

ともあれこの日録は、外崎氏の『土佐自由民権運動史』とともに、土佐の民権運動研究の最大の手引書になることは間違いない。また、研究とまで肩を張らなくても、読む者がテーマをもつて臨めば必ず何かの解答を用意してくれる、そんな「明治の土佐」の案内書である。（下村公彦）



# 7～9月の催し物

## 〔企画展〕

7.14～9.17	死と再生の文化	今回の企画展では、高知の考古・歴史・民俗学の視点から、我々が死とどのように関わってきたか考えてみます。
-----------	---------	---

## 〔講演会〕

午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申込下さい (定員100名になり次第締切り)

7.22(土)	土佐の念仏芸能	井出 幸男先生 (高知大学助教授)
7.29(土)	チベットに生きる人々	則武 海源先生 (立正大学助手)
9.2(土)	医療人類学からみた日本人の生と死の問題	波平恵美子先生 (九州芸術工科大学教授)

## 〔講座〕

午後2時～4時 当日受付

8.5(土)	墓の考古学・2 —墓標の歴史—	岡本 桂典 (当館主任学芸員)
8.26(土)	盆行事に見る 土佐の死者の世界	梅野 光典 (当館学芸員)

## 〔子ども歴史教室〕

当日受付 定員100名

8.12(土)	アニメで見る戦争	AM10時～ PM2時～ AVホールにて上映
---------	----------	------------------------

## 〔3階常設展示室企画コーナー〕

7.1(土)～	戦時資料(2) 高知大空襲	昭和20年7月4日の高知市の大空襲を記録した寺石正路の日記を中心に関係資料を展示します。
---------	------------------	--

## 戦時資料の収集について

五〇年前、瓦礫の山と化した廃墟の中で新生日本はスタートしました。それから半世紀を経た今日、経済大国として繁栄を極めたものの、社会全体に多くの問題が山積しています。今一度原点に立ち戻り、戦前・戦中の日本の社会を見直すことは、戦争体験のあるなしにかかわらず重要なことだと思います。歴史館では、企画コーナーにおいて館蔵資料によるミニ企画を行う一方、幅広く戦時資料を収集し、戦時下の日本の社会に関するデータを蓄積していきたいと考えております。貴重な戦時資料をお持ちの方は、是非ご連絡いただきたく存じます。(ご寄贈・ご寄託いただいた資料は大切に保管すると同時に、常設展や企画展で有効に活用させていただきます)

戦時資料の収集項目としては、こどもの玩具や図書類、国民学校に関するもの(学童の制服一式・教科書・配属将校資料他)、空襲に関するもの(警防固制服・消火用砂弾・防空用電球カバー他)、軍隊資料(出征兵士を送る幟旗・兵士の軍服・徴兵検査合格証他)、代用品(キセル・アイロン・湯たんぼ他)、その他として、モンペ・隣組の回覧板・戦意高揚ポスター・戦時国債・国民労務手帳等を考えております。

〈担当〉 当館学芸員 野本 亮

## 〔歴史館日録〕

月 日	出来事
平成七年	
四月二八日	企画展「おもちゃ」遊びのかたち「開幕
五月一三日	子ども歴史教室「おもちゃを見よう」
五月二〇日	史跡巡り「南国市の史跡巡り」
六月一〇日	子ども歴史教室「服のうつりかわり」
六月一日	企画展閉幕

## へびとこくとく

夏の企画展では、死の問題について考えてみようと思っております。「チベット死者の書」も展示します。(岡本) 二五年ぶりに城田コレクションを一堂に展示した企画展「おもちゃ」遊びのかたち「楽しい郷土玩具の数々に、寄せいただきました。さて、あなたのかた「遊びのかたち」は? (中村)

平成七年七月一日	編集・発行	高知県立歴史民俗資料館
		〒793 南国市岡豊町八幡1099-11
	TEL	0888(62)2211
	FAX	0888(62)2110
	開館時間	午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
	休館日	毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日) 12月28日、1月4日
	入館料	大人(18才以上) 400円 団体(20人以上) 300円 高校生以下は無料
		療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳所持者とその介護者(2名)、高知県長寿手帳所持者は無料。
		印刷・川北印刷株式会社